

「絵からこぼれるはなしの話」

ゲスト：田村実（タムラ堂）

田村 私がなぜ今日ここにいるのかというと、越後湯沢の全国童画コンクールの審査員をしていて、2016年に野間さんの《はじめてうそをついた日》という絵が川上四郎記念大賞を受賞したことが理由です。すごく不思議な絵で、童画とは何かという問題もあるんですが、審査員一同、この絵を大賞にするしかない一致したんです。ぼくは童画とは物語がどこかに込められているものだと思うんですが、この絵はとても繊細で美しいんですけど、どこか居心地の悪さを感じられる、それが観る人に訴えかけてくるものがあると思ったんです。

野間 私が賞金50万円もらえてうれしい、という話じゃだめですよ（笑）。居心地の悪さというキーワードは、初めて聞きました。この絵は、自分がすごくうそつきで、ということからはじめていたんです。幼少期からうそをつき続けていて、それを受け入れている自分と、それじゃだめだっと思う自分が、波のように4年に1回のオリンピックくらいの期間で襲って来るんですよ。ちょうど武蔵野美術大学の大学院の2年生で、何で自分はうそをつくんだろうと、日常生活に支障が出るくらい考えていたときに、絵に描くという行為を通して自分自身につきつけると言いますか、ストレートに向き合うために描いたのが、この絵だったんです。いちばんはじめにいつうそをついたんだろう、と考えて現れた絵ですね。

田村 自分のなかにある何かを表現することによって、自分が救われていくことがあるのかなと思ったんですが。

野間 絵を描くということは、幼い頃のひとり遊び的な状態からずっと続いていたんですけど、20代になって、絵を描いていて夢中になれる、楽しいとか、ちょっとうまくなったとか、そういうことではなくて、絵を描くことが必要になったということがあって。ごはんを食べるとか寝るとかしゃべるとか、他のことでは替えられない。楽しいという感情をもたらしてくれる行為は他にもいっぱいあるんですけど、絵を描くことでしかできない、自分自身が見えるような。もちろん水彩という素材も切り離せないんですけど、絵を描くことが必要になっているというのは、救済というか、それがあから続けていくのかなとは感じますね。

田村 野間さんは音楽をされていたそうで、作品からも音を感じるんですが、自分で意識することはありますか。

野間 音楽的ですね、とか、何か音楽をやっていますか、とか絵を介して言われることは、あまりないですね。でも音楽というか、音というのは常に、タイトルも日本語の意味ではなく音で考えたりするので、音はずっと意識せずともあるものだと思います。今でも音楽は好きですし。

田村 記憶違いでなければ、絵を描くときに演歌を聴く、と。今でもそうなんですか。

野間 私も音楽は広く浅くなんですよ。こればかり聴くということではないんですけど、お会いした当時は、戦前歌謡曲をよく聞いていた時期ですね。それが絵に反映されるかどうかは置いておいて、鶴田浩二とか淡谷のり子とかを聴いていました。

田村 何か意表をつく感じがあったんです。

野間 それだけずっと聴いているのであれば、もう少しその要素が反映されると思うんですけど、いろいろな音を選び好みせずに聴くので。音がある環境のなかで描く方が好きですね。無音の状態だと自分の頭のなかの声、口に出す前の自分で思っていることが出てきてうるさいんですよ。だから絵を

描いているときは、何かしら音を鳴らしている状態にしていますね。

田村 具象じゃないけれども、今は亡き元永定正さんが演歌好きで、講演会をやると演歌を歌うんですよ。自分が演歌の世界と遠いから、演歌に絵を描く人に訴える何かがあるのかなと思ったんですけど、そういうわけじゃないですね。

野間 でも演歌の日本語は、日本人のDNAに刻まれているのかなと思うくらい共感させられるんですよ。不思議だなと思います。演歌だけではないかもしれないけど。

田村 最初は油絵を勉強するはずが、水彩に行ったというところをあらためて聞かせてください。

野間 武蔵野美術大学の油絵専攻に入学して1年目の冬に、そもそも私は油絵が好きじゃなかったということを自覚して。当時同級生を見わたしても、みんな油絵だけやっているわけでもなかったんで、あらためて私は何をやりたいんだろうと素材目線で考えたときに、幼少期から触れてきたものをとりあえず使ってみようか、と水彩を使ったところ、これだ、と直感するものがあった。それからいろんな先生の言うことを全部無視して、大学院までずっと水彩で押し通して。油絵の臭いがだめとかアレルギーという人もいるんですけど、そういう理由ではなくて、絵具の物性とか筆を置くときの感触とか、描くときに扱っていかなければいけないことすべてに心が揺れ動かなかったというのが一番大きくて。油絵を観るのは好きなんです。ただ、油絵を描くのは非常に気持ちが後ろの方であって、身体的な拒否反応から水彩に進みました。

田村 水彩というと油絵に比べて淡い感じの、印象が強くないというイメージがあると思うんですけど。

野間 水彩に対するイメージがあったわけではないです。あくまで私のなかにあるものを手や筆を通して表面に浮かび上がらせるという自分中心な考えだったので、何で描こうが大事なのは私のなかにあるものを出すことだという印象しかなかった。油絵に比べて水彩がどうだという冷静な目線はもっと後のことで……

田村 実際に描かれている作品は水みたいなのが多くて、焦点が定まっているというより、ややぼんやりしたなかにいろんなものが浮かび上がってくる印象があるんですけど、魚の絵が多いのは理由があるんですか。

野間 私は実際にものを見て描くので、魚を描くときには魚を用意します。魚は食べられるから、という理由が大きかったです。ただ、水彩の表現って何だろうと思っていたときに魚が出てきたのは、ここにものがありますというような重力には興味なくて、宙に浮いている、地に足がついていない感じが自分は好きだから、それがモチーフに自然とつながっていったんだろうと後から思います。

私は出汁をとって飲むのが好きなんですけど、何で好きなのかというと、そのものがいなくなっているのにそのものを感じるということに、ものすごく惹かれるんです。電車に入った瞬間に、全員降りちゃったけど、さっきまで人がいた温度とか匂いとか気配に、そのものと対峙しているとき以上に、自分の心がざわざわする。もちろんそれで水彩を選んだわけではないけれど、いろんな自分の選択肢や好みを考えたときに、そのものが存在していることに、あまり興味がないのかなど。いなくなったとか、いたかもしれないとか、気配というものに自分が執着しているのかなどと思って。今回の展覧会に寄せたステートメントにも「足あと」という言葉がしっくりきて使っているんです。水はもちろん乾いてしまうとなくなりますが、これぐらい水の量を使っているよな、という痕跡を見るのが好きなんですよね。

田村 下描きをしないそうですが、最終的に仕上がる作品を描く前にどのくらいイメージされていますか。

野間 大学院で水彩の表現について考えはじめたときに、紙の白を大事にするためには下描きはいらさないんじゃないかと思ったんです。あらわれたものから私が反応していきこうというところでやっているんですけど、はじめはうまくいかないの、エスキースをいくつか描いてから画面に落とし込んでいたんです。でも、すでにできあがったイメージで描いていると、完成度が上がっていくというより、どんどん臆病になっていくので、いまはイメージも何もない状態に近いですね。目の前に水や絵具を置いて、見えたものから、そのやりとりだけで描いています。

田村 紙というのが重要で、水彩用とか版画用とかいろいろ試されているようですが、今回は版画の紙が多かったんでしょうか。

野間 今回は半分以上の作品が、お店に行ったら版画用紙として売られているものですね。

田村 紙が違うことで作品のでき方は全然違うものですか。

野間 単純に絵具を置いてみて、しみこんだ後から「洗い出し」と言ってもう一回絵具を落とすために洗うこともできるんですけど、それができる紙とできない紙はあります。本当に近づいていただくと、紙によって凹凸が違って、細目だったり中目だったり荒目だったり、同じ紙の種類なんですけど、表面の加工が違うことによって絵具の色の乗り具合が違うので、色の見え方が違うこともあります。油絵だと自分で下地を作りあげるんですけど、私の場合はプロの作りあげたものをお預かりするので、できるだけ違いを最大限に生かせるようにしています。この紙はグラデーションが得意だから全面に生かそうかなとか、この紙は明るくなりやすいから発色の良い絵具を使おうかなとか、そういう考え方で使い分けています。

田村 水彩は紙の白地をどう生かすか、紙とのやりとりがかなり問われると聞いているんですけど……

野間 もちろん出発点は、なるべく薄く乗せることが良しとされていたんですけど、油絵が出てきて、水彩が油絵に対抗したいとなったときに、ターナーとかは、白をあえて不透明の絵具に乗せたりして、ほかの素材を見据える表現もあったので、紙の白を生かすだけが水彩ではないと思っているんです。ただ、それを知っていると知らないのでは、紙に対して身構える姿勢は変わるのかなと思います。

田村 タイトルとか言葉の問題は、ぼくは絵本の編集をしているので、たいへん興味深いです。優れた絵本は文章を絵であらわすのではなく、文章が絵を説明するのでもなくて、絵と文章が拮抗していく。タイトルの言葉、音と絵が響きあって、さらにその世界を広げていくものなのかなと思うんですよね。

野間 そうだと思います。その通りです。

田村 今回の作品は、今までより抽象に近い表現というのか、何が描かれているのが重要ではなくて、観る人の想像力というか、心の動きが重要なかなと思うんですよね。

野間 今までの個展では、人物がどこかしらにいた作品をかならず出してはいたんですけど、今回はまったくなくて。魚とか植物とか、固有名詞で語れるものもあるんですけど、どちらかという色と形だったり、観たときの全体の印象だったりというものが多い。「説明的」というのが自分のなかで非常に恐ろしい言葉で、はっきり描いてあるから説明的とは思わないんですけど、自分が頭でっかちなので、名前のわかるもので描いてしまうと、意味づけをしなくなってしまふん

です。人がいたら、この人はどこにいるんだろう、いつだろうこの時間は、とか、どんどん具体的に描いてしまっって説明臭くなってきたのが数年前だったんです。水彩はもっと良い表情が出るのに、自分はいつも説明で終わって、何だこれは、許せん、と。もうちょっと色と形だけで反応できないかな、もうちょっと水の可能性を、とか考えて、あまり大きな作品は描かなかったんですけど、もっと水彩の可能性を見たいとなると画面が足りなくなってしまっって、今回自分にとって大きめの80号の作品を描いて、説明から逃げて……

田村 今までこういうタイプの作品を拝見したことがなくて、すごいなと思ったんです。今回のトークも、事前の打ち合わせで、どこを正面にするかといろいろ考えて、やっぱりこの大きな絵《タネマクジュウリョク》を背景にしたいということになったんですよ。それくらいこの絵はインパクトがある。もうひとつは技法的に水彩だけじゃなくて、いろんなものをミックスされている。

野間 素材としては、ファブリアーノ水彩紙、透明水彩、墨、インクかな。透明水彩だけではないですね。具体的には、黒いところは全部墨です。墨と言っても、ふつうは固形の状態で墨を磨って液体にして使うんですけど、いきなり水を含ませた紙の上に墨で描いていくと、水の量によって、紙の上で磨るように墨がしっかり乗るところもあれば、水にまかせてぼやけるところもある。紫の部分は顔料インクなんですけど、水彩と比べるとインクの方が水との親和性が高くて、水彩が時速10kmくらいだと、インクは50kmくらいの感覚で水のなかを泳いでいくので、自分の思っている5倍くらい向こうに行っているような感じがします。結局、見てもらいたいのには水の表情なんですけど、透明水彩だけではこの伸びは出ないんです。一般的にインクは光に弱いので、今までは色褪せをしてしまうのが怖くてなかなか作品に使わなかったんですけど、そんなのはもうどうでも良いか、誰に何を気にしているんだと思って、いつも自分の手もとで描いているときにこんなに良い表情があるんだから、大きなところで行ってこい、みたいな気持ちでやったんです。水を媒体にしているんですけど、それぞれの素材によって三者三様の絵になっています。ただ、大きい画面が苦手なので、イメージが細切れにはなっているんですけど。

田村 これからの仕事として、こういうことをやってみたいということはありますか。

野間 私は全部の絵を、ひとりの空間にとじこもって仕上げていますよ。魚も買ってきたものを目の前に置いて、植物も全部拾ってきて描いているので、仕事はいつもの風景のなかで、水彩とのやりとりと自分のなかに潜っていく行為だけで完結しているんですよ。それはおそらく一生できるし、それをやりたいんですけど、水彩という素材のことを考えたら、こんなに身軽に水があればどこでも描けるものなので、自分が現地に赴いて、その瞬間をカメラじゃなくてそこで水彩を描くことは、気持ちとしてまったく今まで興味がなかったんですけど、そういうこともやっていきたいという気持ちはあります。あとはずっと考えているのは、日本にいても数年前には手に入らなかった海外の水彩絵具のブランドが、日本で卸を請け負う業者が増えてAmazonで買える時代になっているんですけど、それでも知らぬ国の水彩絵具や紙があるので、世界じゅうの紙や水彩絵具を見て死んでいきたいですかね(笑)。

田村 楽しみです。

野間 健康に気をつけてがんばりたいと思います。

(まとめ：岡村幸直)